

日本の英語教育をイノベーションする「スーパー・ティーチャー養成モデル」の展開  
ー教員養成大学の連携による「カナダ・ビクトリア大学における  
ハイブリッド型 TEFL 研修プログラム」の共同実施ー

2023 年度  
成果報告書

報告書本体.....	1
別添① 模擬授業の分析.....	10
別添② BEVI を利用した学びの評価.....	13

## 0. はじめに

世界のグローバル化を受けて、英語での実用的なコミュニケーション能力の養成が求められて久しい。この間、英語教育においてもさまざまな改革・取り組みが行われ、特に現場レベルでは指導法の試行錯誤が続いたが、いずれも目立った成果があがっているとは言い難い。いかに国・行政のレベルで優れた教育改革が推進されたとしても、外国語教育における革新的な指導法が提唱されたとしても、それを教室で形作ることができる人材、すなわち「英語教員」の存在がなければ無意味である。

大阪教育大学（以下、「本学」）ではこれまでも高度な英語力と指導力を兼ね備えた教員を輩出してきたが、これからの時代で求められる英語使用者の育成に貢献できる英語教育を実現するためには、さらに高いレベルでの英語運用能力・英語授業実践能力・異文化理解力を兼ね備えて、それらを学習者の実状・多様性にあわせて柔軟に活用できるような英語教員の養成が必要不可欠である。

本報告書はそのような英語教員（スーパー・ティーチャー）を養成する一環として、上述のような能力の獲得につながるハイブリッド海外研修を開発して、それを教員養成の課程に組み込むことを目指した取り組みについてまとめたものである。

## 1. 事業概要

本学教員養成課程において英語教員を目指す学生が、カナダにある協定校ビクトリア大学の TEFL（英語教授法）研修をオンライン事前研修 7 週間と現地研修 5 週間のハイブリッド形態で受講し、多文化社会の中で高度な英語運用能力（CEFR B2～C1）と最新の英語教授法を習得する。卒業後は、学校現場のリーダーとして日本の小中高における英語教育改革を推進する人材となることを目指す。本事業は、この研修を教育課程に組み込むための調査研究プロジェクトである。プロジェクト初年度である一昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でカナダへの渡航が叶わず、12 週間の研修全てオンラインで実施されたが、昨年度は計画通りにハイブリッド形態で行われ、参加した 10 名全員が TEFL Certificate を取得した。そして、プロジェクト 3 年目の本年度は、本学の学生 6 名及び北海道教育大学の教職大学院生 1 名、計 7 名が参加し、全員が TEFL Certificate を取得した。本プロジェクトでは、英語科教員養成改革の成果を波及させることを目指しており、北海道教育大学からの参加者を得たことは、他大学への展開の第一歩となった。

## 2. 事業につながる課題の認識

加速するグローバル化の時代に英語は国際共通語（lingua franca）としての地位を確立しているが、日本人の英語力はアジア諸国の中でも非常に低いレベルにとどまっている。その解決のため、いわゆる「使える英語力」、すなわち「英語によるコミュニケーション能力」の向上を目指し、この間、国をあげて英語教育改革を推進してきているが、目立った成果を上げているとはいえない。その大きな原因のひとつとして、英語教員の英語力お

よび英語教授スキルが十分ではないことが挙げられる。

本学では第3期中期目標・計画（2016（平成28）年度～2021（令和3）年度）において英語教員を目指す学生に、英語教員としてのベースとなる確かな英語力を在学中に身に付けさせるため、CEFR B2 レベルに相当する「英検準1級相当」の取得を促進し、最終の3年間で平均80%前後の学生がこれを達成するという成果をあげている。しかしながら、今後、小学校、中学校および高等学校において、コミュニケーション能力の育成を主眼とする授業を展開するためには、CEFR B2 レベルを超える英語力を持つ英語教員の養成が不可欠である。加えて英語教授スキルについては、国内の英語教育学だけではなく、広く最新の第二言語習得理論に裏打ちされた「英語による英語の授業」を実行できるだけの知識とスキルを身に付けさせることが不可欠である。

また英語によるコミュニケーションを行う際には、単に高い英語力だけでなく、文化の違いを認め、柔軟に対応する「異文化理解力」あるいは「多文化共生力」も重要であることを忘れてはならない。在学中にそのような「総合的な英語教授スキル」を身に付けるためには、日本を飛び出し、実際に英語圏に身を置き、異文化の摩擦の中での「英語によるサバイバル体験」を経験することがどうしても必要となってくる。

### 3. ゴールイメージ

本事業は2.であげた課題を解決するために、本学で中高英語教員・小学校教員を目指す学生がオンラインとオフラインを組み合わせるとータルで4ヶ月程度のスパンで英語・英語指導法を学ぶ研修を開発して、そこから得られる高度な英語授業実践力だけでなく、現地での生活等から得られる高い異文化理解・多文化共生力をも兼ね備えた、総合的に優れた英語教員の養成を目指すものである。具体的には以下の5つを達成すべきゴールとして挙げた。

#### ①英語運用能力（4技能）の向上

オンラインでの7週間の英語指導法研修（国内）と英語力強化に特化した4週間+英語指導法短期集中研修1週間の計5週間の現地研修により英語漬けの毎日を過ごすことで、「英語で英語を教える」ための実践的な英語力を身に付ける。

#### ②最新の英語教授法の習得

TEFL コース内で最新の言語習得・教授理論と実践方法を学び、関連するワークショップ（英米文化・文学等）に参加する。さらに現地の学校で TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages：英語を母語としない者に向けての英語教授法）の授業を視察し、「生きるために必要な英語」を教育する現場を通じて「使える英語」の重要性を認識する。

#### ③学校における多文化教育のための異文化体験（5週間のホームステイ）

現地の家庭にホームステイすることにより、コース外でも英語を使用するとともに、ホ

ストファミリーとの交流を通じて異文化を体験する。また生活の中で英語を学ぶだけでなく、文化の違いから生じる誤解や小さなトラブルを「コミュニケーション」で解決する術を体得する。

#### ④英語教育のプロとしての自負、外国語教員の使命としての学び続ける姿勢の醸成

参加者は英語圏で研修を受けることにより、実践的な英語運用能力を向上させ、教授スキルを習得し、英語教員としての自信を獲得する。同時に、外国語の学習には様々なアプローチで学習を継続することが肝要であることに「英語学習者の自己」として気づき、「学び続ける教師」へと成長する。

#### ⑤国際的通用性を有する「TEFL Certificate (修了証)」の取得

参加者はオンライン7週間(56時間)、現地5週間(150時間)の研修を修了することにより、TEFL Certificate(修了証: Certificate of Completion in Advanced Skills in Teaching English as a Foreign Language)を取得する。この修了証は参加者たちが高度な英語運用能力と英語教授法を身に付けた証となる。

さらに、上記のようなゴールを達成できるハイレベルな英語教員の養成は、一過性のものではなく教員養成カリキュラムの中に組み込み、体系的に実施していくべきものであることから、本研修を第4期中期計画期間(2022(令和4)年度~2027(令和9)年度)において、以下のような流れで4年間の教育課程に組み込む予定である。

- ① 教員養成課程の英語教育コース専門科目「第二言語習得論」を、本研修を単位化する際の対象科目として設定して、同授業に含まれるべき内容も踏まえて、英語指導法研修の内容を精選する。
- ② 本事業によって研修に参加した学生の学習成果を検証して、研修単位化の対象となる「第二言語習得論」のシラバスを作成する。
- ③ 本学教務課と研修実施時期と単位認定方法について検討して、令和5年度以降に研修単位化科目としてカリキュラムに実装する。その際、コースとして留学促進期間に設定した3回生の第4ターム(12月~翌2月:ギャップターム)を効果的に活用する。

このように本調査は、いかにして実効性のある海外研修を修業年限内に組み込み、かつ最大限の学習効果を上げることができるか、言い換えれば、学校現場において英語教育をリードできる内容を含む「英語のスーパー・ティーチャー養成モデル」をいかに構築するかを検証するものである。

## 4. ゴール達成のための取り組み

上記ゴール達成のための研修先として、10年来本学の英語教員研修事業で現職教員、大学院生を受け入れてきたカナダのビクトリア大学を選定して、現職教員向けに展開されて

いた TEFL 研修を学部 3 回生向けにカスタマイズし、新たな「ハイブリッド型 TEFL 研修（オンライン 7 週間 56 時間＋現地 5 週間 150 時間）」を開発することとした。本研修の修了者は高度な英語力や英語指導力、異文化理解・多文化共生力を身に付けつつ、TEFL の Certificate を手にすることができる。そして大学卒業後は、学校現場で「英語で英語を教える」コミュニケーション主体の授業を実施して、同時に ALT との協働授業も発展的に開発できる「スーパー・ティーチャー」となり、現場の英語教育をリードし、アジアでトップレベルの英語力をもつ子どもたちを育てることを目指す英語教育改革に大きく貢献する。また事前・事後指導、評価指標等を含めた本研修を「英語のスーパー・ティーチャー養成モデル」として構築し、他の教員養成大学等に提供することにより、日本全体の英語教育改善に波及効果をもたらすものである。

研修の開発が始まった 2021（令和 3）年度から本年度の研修実施に至るまでの流れは、以下の通りである。

#### 【研修内容の開発・検討～2021 年度研修実施】

まずは 2021 年 5 月から約 3 ヶ月かけて研修内容の検討を行った。将来的にこの研修を本学の英語教員養成カリキュラムの一部に組み込むことを念頭に置いて、教科教育法科目や専攻専門科目で取り扱われている内容や英語教員養成コアカリキュラムの内容を整理して、本研修に含まれるべき内容について、研修先であるカナダ・ビクトリア大学担当者とオンラインミーティング及びメールでのやりとりを通して検討した。

一定の研修内容が定まった 8～9 月に、対象となる学生（本学教員養成課程英語教育コース 3 回生以上）に募集に関わる情報を送付して研修参加者募集を開始した。10 名の参加者が決定した 10 月以降、複数回のオリエンテーションが実施され、12 月から 1 月にかけてオンライン英語指導法研修が行われた。しかし年末にかけて新型コロナウイルス感染症の影響で渡航を断念せざるを得ない状況になったため、カナダでの研修をオンラインに移行すべく、ビクトリア大学と内容・日程の再調整を行い、研修参加者に対しても研修内容の変更や必要な手続き等の周知のため、再度オリエンテーションを実施した。その上で 2 月から 3 月上旬にかけて、オンラインでの英語・文化研修と外国語指導に関するワークショップを行い、模擬授業等を中心とした指導法研修で締めくくった。途中で心身の不調により 1 名が離脱したが、残る 9 名は最後まで研修をやり遂げ、TEFL Certificate を授与された。各種の成果検証を行ったところ、スコア上の英語力の伸びは確認されなかったが、授業実践力においては説明・例示の端的さやより内容面を意識した授業展開、特に言語材料の使用場面に関する工夫について向上が見られた。また異文化理解・多文化共生力についても、もともと国際性や多様な価値観の受け入れについては高いものを持っていた参加者であったが、本研修参加を通してそれらがさらに高まったことが示された。

新型コロナウイルス感染症の影響で実施形態を変更せざるを得ないなど、困難の多い研修であったが、参加者は前向きに取り組み一定の成果を残した。また授業実践力や異文化

理解力については向上が見られ、研修内容についても妥当性が確認できた。

#### 【2022 年度研修実施】

2021 年度の研修が上記のとおり新型コロナウイルス感染症の影響で全編オンライン実施にせざるを得なかったことから、2022 年度は本来のハイブリッド型研修の実施を確実に実施することが大きな目標となった。これに向けて、8 月上旬にかけて研修内容をビクトリア大学も交えて再度検討して、一部ワークショップの内容を変更する微修正はあるものの、基本的に前年度と同様のフォーマット・内容で研修を実施することを決定した。

続いて 9 月から 10 月にかけて、昨年と同様に対象となる学生（本学教員養成課程英語教育コース 3 回生以上）に向けて周知を行い、参加者を募集した。10 名の参加者が決定した後、複数回のオリエンテーションを実施して、12 月上旬からの研修開始に備えた。また今年度は 2 月からのカナダでの研修の実施可能性がかなり高い状態であったので、旅行会社や現地エージェントを交えた渡航に関する準備も並行して行われた。そして 12 月からはオンラインでの研修、2 月からは現地での研修に参加して、10 名全員が無事に全プログラムを完遂して、Certificate を授与された。内容の詳細については 2023 年度実施分と大きな差がないため、後述を参照されたい。

#### 【2023 年度研修内容の検討～参加者決定】

基本的な流れは、2022 度と同様である。本年度は、並行して、他大学への展開の第一歩として、北海道教育大学及び福岡教育大学の関係者に対して趣旨説明等を行った。その結果、本学の学生 6 名及び北海道教育大学の学生 1 名、計 7 名の参加者が決定した。その後は、対面とオンラインのハイブリッド型で複数回のオリエンテーションを実施して、12 月上旬からの研修開始に備えた。また、昨年同様、旅行会社や現地エージェントを交えた渡航に関する準備も並行して行われた。

#### 【オンライン英語指導法研修】

オンライン英語指導法研修ではビクトリア大学が提供する Learning Management System (Brightspace) 上に提示される課題に取り組む非同期型学習が週 5 時間と、Zoom を用いた同期型学習が週 3 時間の週あたり計 8 時間の学習に 7 週間取り組み、外国語教授法の最先端について学ぶ。取り扱われた内容は第二言語習得理論の基本、基礎的などころから最新までをカバーした指導法の概観、具体的な活動や指導案作成、四技能五領域や文法・語彙の指導についてである。オンライン研修の内容は 2 月以降の現地での研修やワークショップに連動しており、複数回の課題提出で学生の理解状況が適宜確認されていた。

#### 【カナダ・ビクトリア大学における現地研修】

カナダへの渡航後は 4 週間の英語集中トレーニングと 2 回の現地学校見学、4 回の外国

語教育関連ワークショップへの参加、および最終週の指導法集中トレーニングが実施された。英語集中トレーニングは、ビクトリア大学の English Language Centre が提供する Monthly English Program に参加した。各々の英語力に応じてさまざまな国・環境からの学習者からなるクラスに配属されて、ホームステイでの滞在も含めて英語漬けの環境下で英語・異文化理解力の向上に努めた。並行して学校見学も実施された。2月9日に Glanford Middle School を訪問し、参加者が2グループに分かれて、日本文化について紹介した。1つのグループは、オノマトペ（動物の鳴き声）とこどもの遊びの一つである「かごめかごめ」を扱った。もう一つのグループは、福笑い、節分、折り紙を扱った。3月4日には Mt. Douglas Secondary School を訪問し、授業を見学するとともに、教頭や先生方と話す機会を得て、学校運営や授業運営について知識を深めることができたようである。またワークショップでは、①Teaching Pronunciation in EAL、②Using Simulations in the Language Classroom、③Using Drama Techniques in English Language Environments、④Student-centred Pedagogy: Design Basics について学んだ。最終週の指導法集中トレーニングでは、外国語指導におけるクラス運営や評価、教師としてのキャリア形成について学び、締めくくりとして模擬授業に取り組んだ。

#### 【成果検証測定】

本研修は参加者の学習状況の把握と研修自体の評価のため、様々な角度から成果検証を行なっている。英語力については IELTS の公式テストを研修前後に受験させた。英語授業スキルについては研修前後に指定したテーマ・題材に基づき模擬授業を各自で録画して提出させて、各動画に対して教師の言葉・指導・生徒対応の観点から本学教員が質的に評価し、参加者にフィードバックした。異文化理解・多文化共生能力の測定については留学効果検証テストとして使われている BEVI-j を受験させた。

## 5. 取り組みの成果

本事業の取り組み成果は、3.で挙げた参加者にとってのゴールがどの程度達成されたかが1つの大きな指標となる。以下、個別に検証を行う。

#### 【英語力運用能力の向上】

英語力測定ツールとしては、英語力証明のグローバルスタンダードテストとして世界140か国の11,000を超える教育機関、企業、国際機関、政府機関などで採用されている IELTS (International English Language Testing System) の公式テストを利用した。なお IELTS は、①アカデミック・モジュール（大学や大学院への留学や就職を希望している受験者向けのテスト形式）と、②ジェネラル・トレーニング・モジュール（オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、英国への移住または研修を希望している受験者向けのテスト形式）に分かれているが、今回はカナダの大学で開講される TEFL（英語教授法）研

修を受講することから「アカデミック・モジュール」を選択した。

参加者は、研修前（2023年11月）及び研修後（2024年3月）にIELTSを受験した。4技能（ライティング、リーディング、リスニング、スピーキング）がテストされ、試験結果は1.0から9.0までの0.5刻みで、各技能のバンドスコアと総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアが通知される。参加者の各技能のバンドスコアの平均と総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアの平均は表1の通り。なお、参加者1名については研修後のIELTS結果が未着のため、表1は参加者6名のスコアに基づいている。

表1

	事前	事後	差
リスニング	5.8	5.8	0.0
リーディング	6.2	5.9	-0.3
ライティング	5.8	5.8	0.0
スピーキング	5.2	5.3	0.1
オーバーオール・バンドスコア	5.8	5.8	0.0

総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアの平均は、事前も事後も「5.8」である。これはIELTSの評価基準では「中程度のユーザー」（バンドスコア5）と「有能なユーザー」（バンドスコア6）の中間に位置するが、限りなく「有能なユーザー」に近い値である。「中程度のユーザー」は、「不完全だが英語を使う能力を有しており、ほとんどの状況でおおまかな意味を把握することができる。ただし、間違いを犯すことも多い。自身の専門分野では、基本的なコミュニケーションを取ることが可能」なレベルである。また、「有能なユーザー」は、「不正確さ、不適切さ、誤解もみられるが、概ね効果的に英語を使いこなす能力を有する。特に、慣れた状況下では、かなり複雑な言葉遣いの使用と理解ができる」レベルである。つまり今年度の参加者は、英語教師として基本的なコミュニケーションを取ることが出来るレベルだということができる。4技能のスコアは大きく変動しておらず、語学力に関しては、短期間の留学では目に見える向上にはつながらないと言えよう。ただ、スコアの大きな伸びを示した昨年度の参加者と比較した場合、事前のスコアは今年度の方が高く、事後のオーバーオールスコアに大きな差はないことから、すでに高い英語力を有していて、スコアでの上昇を示す余地が少なかった可能性はある。

**【最新の英語教授法の習得：詳細は別添報告書①を参照】**

本研修の核である英語教授法の習得およびその実践スキルについては、研修前後に参加者が各自で実施した模擬授業のビデオを本学教員が視聴・評価したものに基つき成果検証を行った。実施概要、評価・分析方法、詳細な結果については別添の報告書に委ねる。

【学校における多文化教育のための異文化体験：詳細は別添報告書②を参照】

研修参加者の異文化理解・多文化共生能力がどの程度高まったかについては、留学効果検証テストとして使われている BEVI-j を受験させた。こちらも詳細については別添の報告書に委ねる。

【国際的通用性を有する「TEFL Certificate（修了証）」の取得】

参加者 7 名全員が研修を完遂して、Certificate of Completion in Advanced Skills in Teaching English as a Foreign Language を取得した。

## 6. 研修の教員養成課程カリキュラムへの組み込み

前述の通り、本研修は一過性のものではなく教員養成カリキュラムの中に組み込み、体系的に実施していくべきものである。今年度より、本研修の単位化を実現させることができた。具体的には、研修参加者で希望するものは、本学教員養成課程英語教育コースの専門科目「第二言語習得論」を履修した上で、成果発表会での発表など必要な課題に取り組むことにより、同授業の単位が認定される。同授業の到達目標は、以下の通りである。

- ①日本の英語教育を「海外の外国語教育の歴史と最先端」という視点から考えることで、第二言語習得・学習者理解・指導法についてより広く深い視点を持つ。
- ②University of Victoria での 5 週間の語学・TEFL 研修により、高度な英語授業実践に必要な確かな英語力を身につける。
- ③オンラインでの学習や現地での英語・外国語指導法の研修をベースに模擬授業を行い、専門家からのフィードバックを基に確かな授業実践力を身につける。

単位認定については前年度参加者の単位を翌年度前期に認定することとして、今年度は 2022 年度に実施した参加者の内、希望した 6 名の単位の認定を行った。これにより、教員養成課程カリキュラムへの組み込みという本事業の大きな目標の 1 つが達成されたこととなる。

## 7. 総括・今後の課題

本事業は英語教員を目指す学生が将来的に分野をリードすることができるだけの英語力・英語授業力・異文化理解力を身につけるための海外研修を教員養成課程に組み込むことを目指したものである。今年度は、カナダでの現地研修まで含めて予定されていた研修を全て実施することができた。また、本学の英語教員養成カリキュラムへの組み込みが実施されたことが大きな成果と言える。

今回の研修で目指したスーパー・ティーチャーとして必要な能力の育成に関しては、「英語授業力」と「異文化理解・多文化共生能力」という 2 つの側面から観察したが、それぞれ研修前後の模擬授業の分析と BEVI-j の結果から一定の上昇が見られた。英語授業力は本研修の内容の中核を構成するものであり、この点について上昇が認められたことは、

今回の参加者が、本学とビクトリア大学がこれからの日本の英語教員に必要な知見を盛り込んで共同開発した研修内容を確実に身につけてくれたことの表れであると言える。

今後の課題としては、引き続き、この研修の継続的な実施に向けたさまざまなリソースの確保である。実施主体となっている英語教育コースの教員だけではなく、学生派遣に関わる事務を取り扱う国際室からも多くの支援を受けている。今後このプログラムがカリキュラムの一部として自走するにはどのように効率化を目指していくかを更に検討する必要がある。また本研修は世界的なインフレや円安、航空運賃の高騰と相まって、参加費用が高額である。研修内容・実施に無駄がないかを不断に確認して必要な見直しを施しつつ、外部資金の獲得、学生への奨学金獲得の奨励などに取り組む必要がある。

## 8. おわりに

本年度は、カリキュラムへの組み込みというレベルまで含めて、完成形態に近いレベルでの実施ができた最初の年度と言える。具体的には、本研修の単位化を実現し、教員養成カリキュラムの中に組み込みことができた。また、英語科教員養成改革の成果を波及させるという目標の第一歩として、他大学の学生の参加を得ることができた。今後は、研修先の開拓と他大学へのさらなる展開を実現させることで、英語運用・英語授業・異文化理解をさらに高いレベルで実践できる英語教員を養成し、日本の英語教育の発展につなげていくことができればと考えている。

## スーパー・ティーチャー養成研修プログラム 研修前後に実施した模擬授業の分析

英語教育部門 篠崎 文哉

### 1. 模擬授業の目的

本研修プログラムに参加した学生の授業の構成力や模擬授業における指導技術が、研修を通してどのように変容したかを明らかにすることである。

### 2. 参加者

本研修参加者7名のうち6名は、大阪教育大学において英語科教育法など教科指導に関する授業をすでに履修し、教育実習にも参加済みであった。また、残りの1名である北海道教育大学の教職大学院生も同様の学習を終え、教員免許を取得済みであった。

### 3. 研修概要

本研修では、2023年12月4日から2024年2月2日まで、週3時間の同期型授業と5時間の非同期型授業を実施した。そこでは、学生は第二言語習得理論や様々な教授法やテクニック、アクティブラーニングや学習者中心の文法・語彙指導法などを学んだ。現地研修としては、2月5日から3月1日まで、主に英語授業や指導法ワークショップに出席したり、現地の学校を視察したりした。3月4日から3月8日までは、実践的な練習として模擬授業を繰り返し行った。

### 4. 模擬授業の概要

研修プログラム開始直前である2023年12月初旬と、終了直後である2024年3月中旬に、以下の条件で模擬授業を実施することとした。使用する教材は、指定された検定教科書（中学校2年生）とし、言語材料としてto不定詞（名詞的用法）を挙げた。教科書本文を扱うかどうかは単元計画や指導法に鑑みて検討することとした。模擬授業は、各自で動画を撮影し、学習指導案とともにデータを提出することを求めた。なお、模擬授業時に生徒役は配置しない形式とした。

<条件1>50分授業を構成する各段階の中心的部分が満遍なく含まれた15分程度の模擬授業とすること。例えば、「導入—展開—まとめ」という形であれば、それぞれの段階を含め、導入のみなどとししない。ただし、時間は各段階に均等に配分する必要はない。

<条件2>特に50分完結型ではない授業を模擬授業として行う場合は、本時に関わる前回や次回の授業の詳細も学習指導案において説明すること。ここで言う50分完結型の授業とは、例えば「導入—展開—まとめ」という形の授業を1時間の授業

として行うことを指し、50分完結型ではない授業は、例えば「第1次：導入—展開」「第2次：展開続き—まとめ」のように2時間以上にまたがって行うものを指す。

<条件3>ALT等とのティーム・ティーチングではなく、JTEによるソロ・ティーチングであること。

<条件4>ICT機器を使用する場合は、使用する端末やアプリ、使用するねらいなどの説明を学習指導案に簡潔に記述すること。

模擬授業における学生の変容を検証するため、研修前と研修後に実施した模擬授業は、同じ教材や言語材料とした。

## 5. 評価・分析方法

研修事前・事後で提出された模擬授業動画と学習指導案を対象に評価を行った。杉森(2011)を参考に、主に「教師の言葉」(話し方など)、「指導」(指導方法や手順、生徒とのやり取り)、「生徒対応」(仮想の生徒への対応など)の3観点からコメントを作成した。

まず、これら3観点から事前に提出された模擬授業動画と学習指導案を分析し、コメントを作成した。次に、事後に提出された模擬授業動画と学習指導案を分析し、事前のものからどのような点において変容が見られたかを中心に分析し、コメントを作成した。そのコメントと研修のプログラム内容を比較し、本研修の成果をまとめた。

## 6. 結果・考察

研修事前に実施した模擬授業動画と学習指導案を分析したところ、授業の構成や各指導段階の展開、指導テクニックなど、英語科授業に関する基本的な知識や技能はある程度身に付けていたことがわかった。具体的には、「教師の言葉」について、英語主体で授業を進める能力があり、かつ必要に応じて日本語を使用することができていた。「指導」については、教師と生徒または生徒同士のインタラクションの機会を設けており、指導事項である不定詞を使った簡単なやり取りをしていた。また、活動の前にはやり方の例示をしたり、必要な表現をしたりして、生徒にとって分かりやすくするという工夫をしていた。

「生徒対応」については、模擬授業の撮影環境に左右されている可能性はあるものの、参加者にとっては一部の生徒のみに問いかけているように見える場面があった。

研修終了後の模擬授業動画と学習指導案を分析し、事前のものから特に変化があったものをまとめる。

「教師の言葉」については、事前の段階からすでに英語と日本語の使い分けをほぼ適切に行うことができていたが、中には英語の使用場面が増えたり、より感情がこもった英語の使用や、より自然な速度の英語の発話が見られたりした。研修中は英語によるアウトプ

ットの機会が多いため、英語を話すということ自体の抵抗感が薄れたことや、模擬授業を繰り返し行ったことで、英語授業に適した話し方を身に付けたことが考えられる。

「指導」については、事前の段階では例示することで理解を促していたが、さらに工夫を凝らし、生徒にとって身近なものを扱ったり、教師自身のことを話したりすることで関心を高められるような工夫が見られた。また、文法説明については一方向的になりがちであるが、英語を交えながら生徒とインタラクションを行うことで、文法についての理解を深めるとともにアウトプットの機会も同時に確保している者もいた。インタラクションについて言えば、オーラルイントロダクションや語彙学習においても積極的にやり取りを行うなど、授業の様々な段階でより活発なインタラクションを想定していることが垣間見えた。加えて、複数の参加者がゲーム性のある活動をより多く取り入れており、生徒の動機づけにも意識を向けることができるようになっていた。言語活動の設定を詳細にし、指導を手厚くしている者も見られた。

「生徒対応」として、生徒の名前を呼んだり、発問のあとにしっかりとした間を設けたりするなどして生徒の存在をより意識し、対応する姿が見られた。また、活動中に生徒の状況をメモし、直後の指導に生かそうとする参加者もいた。

## 7. おわりに

以上のように、本研修を通して様々な変容が見られたが、その要因の一つとしてスパイラルな学習が考えられる。本研修へは、基本的な英語科教育法を学んだ学生が参加しているが、教育法等の授業での模擬授業や教育実習を経験しているとはいえ、英語授業の経験は浅い。理論としては知っていても実際の授業に落とし込めるかというのは別問題であるため、オンライン研修で理論を一部復習しながら新しい知識も取り入れ、現地での学習を通してその知識を繰り返し試すことで徐々に指導力を向上させていると推察される。英語についても、外の世界で使われている英語と教室内で用いる英語の両方を実感しながら身に付けていくことができるのは、本研修の特徴によるものであると考えられる。

## 参考文献

杉森幹彦（2011）「外国語授業分析法の概観と英語授業評価基準の提案」『政策科学』  
18(3), 29-61.

スーパー・ティーチャー養成研修プログラム2023  
BEVIを利用した学びの評価

大阪教育大学 特任教授 山岡 賢三

1. 研究の目的

2023年度スーパー・ティーチャー養成研修プログラム（TEFL2023：オンライン留学含むカナダビクトリア大学留学プログラム）に参加した学生を対象に、BEVIの事前事後のアンケート調査を行い、留学前と留学後の学生の意識変化を分析し、TEFL2023を通じた学生の学びの評価を行う。

2. BEVI とは#

BEVI(The Beliefs, Events, and Values Inventory)は、心理測定学の基準及び手続(Downing and Haladyna1997; Geisinger、2013; Hubley & Zumbo2013; Robinson、Shaver、and Wrightsman1991, 1999 など)に基づき、1990年代初頭に米国で開発が開始された国際的な心理測定テストで、教育、研究、からリーダーシップ・プログラムやメンタル・ヘルスに至るまで、様々な場面で利用することのできる、使いやすくまた柔軟性に富んだ、強力な分析ツールである。BEVI#を活用することにより、学習・成長・変化のプロセスや成果を理解し、それらを促進させることができる。#BEVI テストの結果は即座に 20 以上の強力な分析ツール（留学前後の変化、性別・留学等への関心度別の分析など）により確認することができる。

3. 研究の方法

①BEVIの事前調査から、広島大学2021年度のデータと比較しTEFL2023に参加した学生の特性傾向を分析する。

②BEVIの事前・事後調査を比較し、TEFL2023に参加した学生の特性傾向と事前・事後の意識変化を調査する。

4. 調査対象と時期

①調査対象：事前調査7名、事後調査7名

（TEFL2023に参加した本学英語教育コース3、4回生6名、北海道教育大学1名）

②調査時期：第1回事前調査 2023年11月27日～12月4日

第2回事後調査 2023年3月10日～20日

5. 調査内容

以下の17の尺度で、個人の特性を測る。

- 1.人生における負の出来事、2.欲求の抑圧、3.欲求の充足、4.アイデンティティの拡散、5.基本的な開放性、6.自分に対する確信、7.基本的な決定論、8.社会・情動の理解、9.身体への共鳴、10.感情の調整、11.自己認識、12.意味の探求、13.宗教的伝統主義、14.ジェンダー的伝統主義、15.社会文化的オープン性、16.環境との共鳴、17.世界との共鳴

特に17の尺度の中で以下の国際性の涵養、多様な価値観と関連が強い尺度を注視する。

<中核的欲求の充足>

3. 欲求の充足： 経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり（「子どもの早期教育プログラムにもっとお金を費やすべきだ」、「自分が何者なのかを考えることが好きだ」など）
5. 基本的な開放性: 基本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ率直（「自分というものを常に良いと思っているわけではない」、「自分の人生は孤独だと感じている」など）

<批判的思考>

8. 社会・情動の理解: 自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである、思慮深く、実用主義、意思が固い、自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない（「不幸な人を救うためにもっと何かしなければならない」、「自分の責任を果たしていない人が多すぎる」など）

<自己の理解 >

11. 自己認識: 内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する（「常に自分をよりよく理解しようと努めている」、「取り組むべき課題を抱えている」など）
12. 意味の探求: 意味を模索する、人生にバランスを求める、耐性がある/根気強い、感受性が高い、弱者への思いやり（「人生の意味についてよく考える」、「人生のバランス感覚をもっとよくしたい」など）

<他者の理解>

14. ジェンダー的伝統主義: 男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む（「女性は男性より感情的だ」、「男性の役割とは、強くあることだ」など）
45. 社会文化的オープン性: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである（「自分とは異なる文化を理解しようと努めるべきだ」、「わが国では、貧富の差が大きい」など）

<世界の理解>

16. 生態との共鳴: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している（「環境が心配だ」、「所有者が誰であろうとも、この土地を守らなければならない」など）

17. 世界との共鳴: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる（「世界の出来事についてよく知っておくことが大切だ」、「自分とは大きく異なる人々の集団といることが快適だ」など）

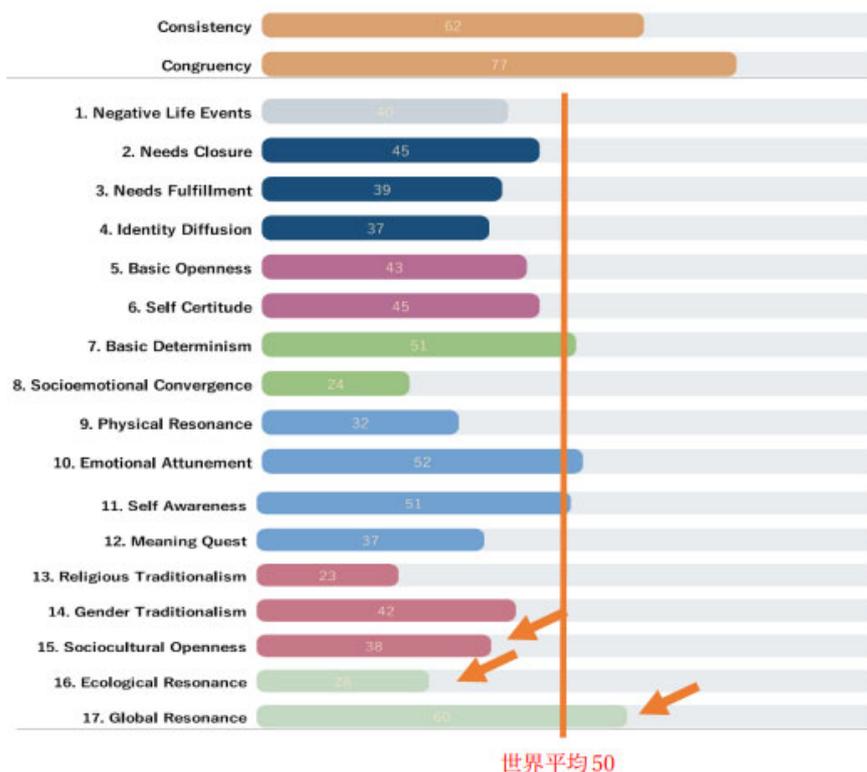
<出所：BEVIの尺度<https://jp.thebevi.com/about/scales/>>

## 6. BEVI 事前調査の結果と広島大学とのaggregate profileの比較

今回の調査対象が7名という少人数であるため、広島大学が2021年度に全学部の1回生1510名を対象に調査したデータと比較する。広島大学の入学者は主に西日本に分布し、本学とよく似た入学者の分布である。また、広島大学のデータは全学部1510名の学生を対象にしているのので、ほぼ平均的な日本の大学1回生の意識が表れているとみなす。尚、世界中のBEVI受検者の平均が50である。

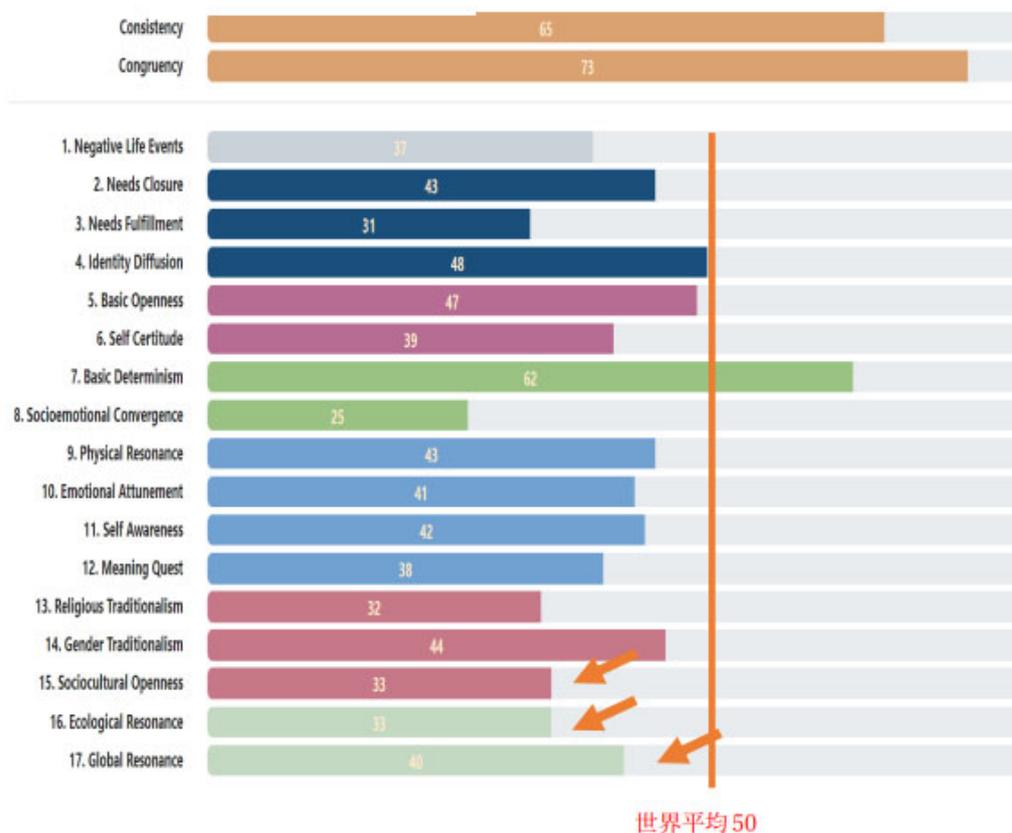
### ① BEVI 事前調査の結果（TEFL2023に参加した学生7名対照）

表1：Time 1(2023.11.27～12.4) aggregate profile



②広島大学全学部1回生1510名

表2：広島大学 aggregate profile

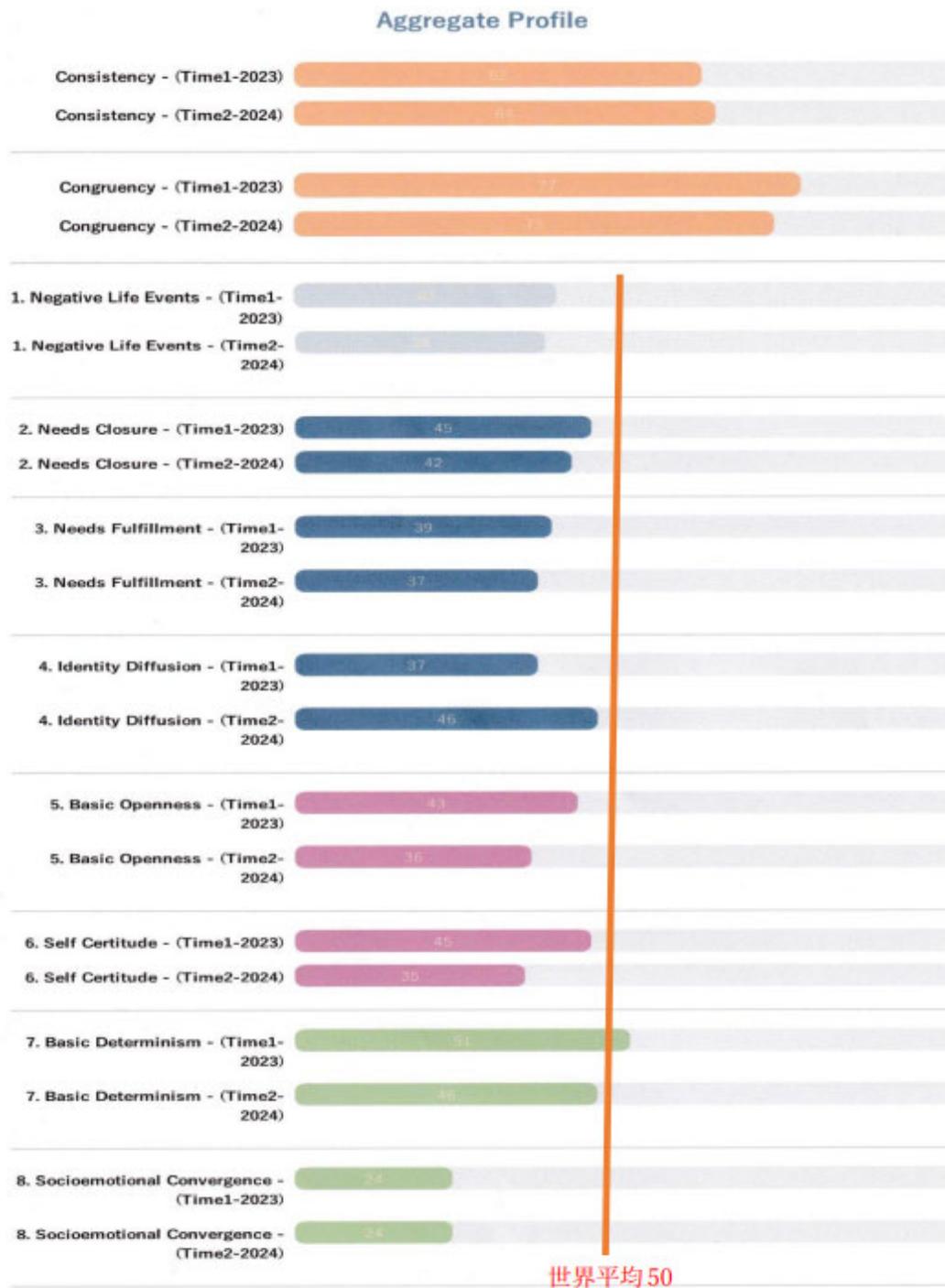


17の項目の内、特に国際理解に関係する項目を取り上げて、広島大学全学部1回生のデータと比較すると、「15. 社会文化的オープン性: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである」では広島大33に対しTEFL2023に参加した学生38、「16. 生態との共鳴: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している」では広島大33に対し本学28とほぼ同じような指標を示しているが、「17. 世界との共鳴: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる」では広島大40に対し本学60と指標が著しく高く、世界平均の50よりも高い。これは元々英語や外国の文化に興味を持っている者が英語教育コースに入学し、大学で3~4年間英語教育に関連したカリキュラムを受ける中で国際性を涵養し、多様な価値観を受け入れる素養が助長されたと考えられる。

7. BEVI 事後調査と事前調査との比較

事前調査：Time1(2023.11.27～12.4)と事後調査：Time2(2024.3.10～3.20)を比較し、学生の意識の変容を比較した。

表3：Time1/Time2 aggregate profile



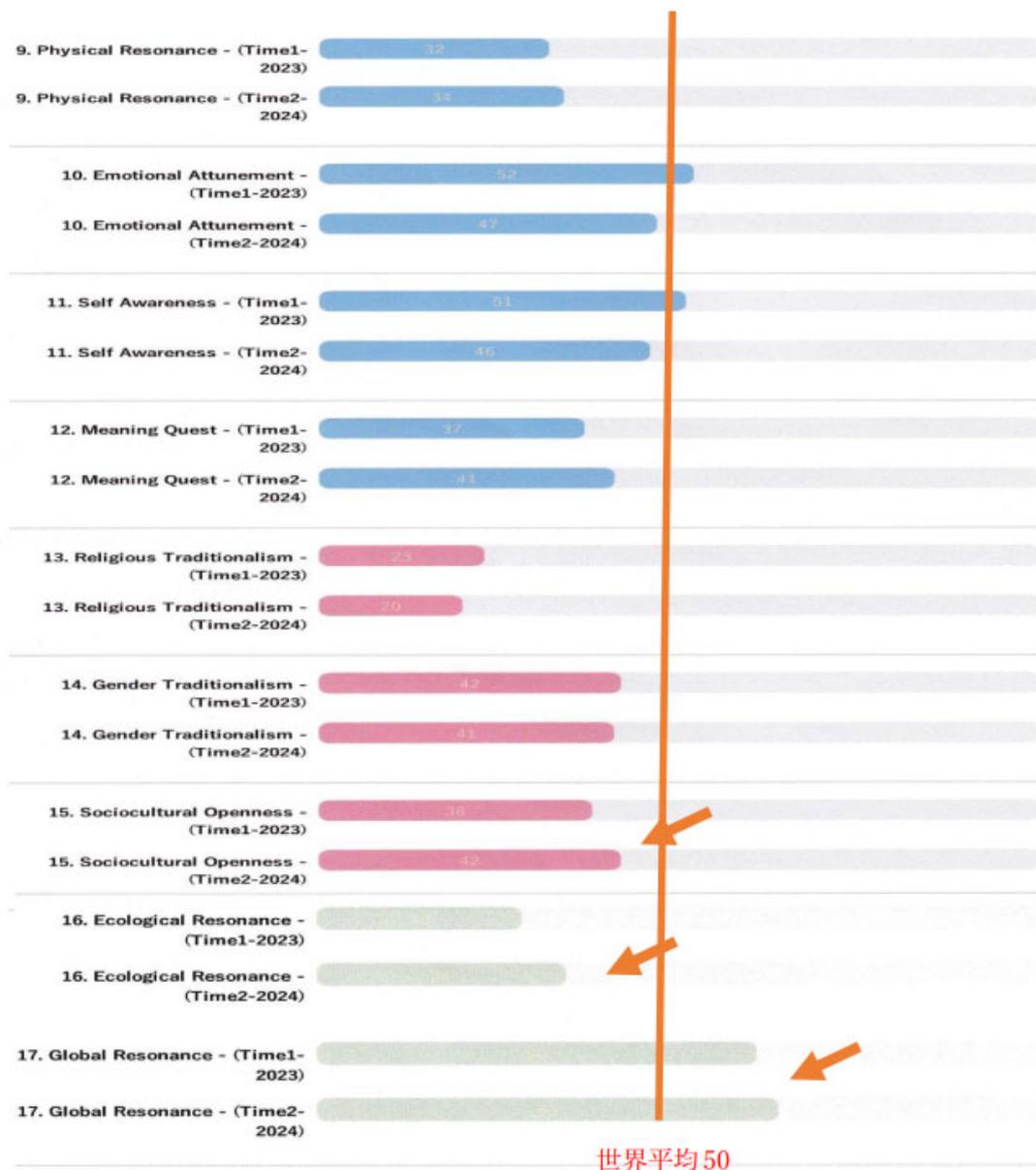


表3を見ると、「15. 社会文化的オープン性: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである」ではTime1:38に対しTime2:42、「16. 生態との共鳴: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している」ではTime1:28に対しTime2:34、「17. 世界との共鳴: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる」ではTime1:60に対しTime2:63と、国際理解に関する項目では事後アンケートの指標の方が事前アンケートより高いことがわかる。

## 8. まとめ

広島大学との比較から、ほぼ平均的な日本の大学1回生に比べ、本プログラムに参加した学生は、「17. 世界との共鳴」において、元々国際性が高く、多様な価値観を受け入れる素養を持っていたと言える。そのような学生が本プログラムに参加していたとはいえ、事前事後の調査を比較すると、「15. 社会文化的オープン性」「16. 生態との共鳴」「17. 世界との共鳴」の指標の結果が高まったことにより、本プログラムを通して、学生の全体的な傾向として、「経験・欲求・感情に対してオープン」「より広い世界に対する気遣い/思いやりができる」「より広い世界を認識する」「内省的、自己の複雑性を受け入れ、人の経験/状態を気遣い、難しい思考/感情を許容する」「文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的でオープン」といった国際性の涵養、多様な価値観を受け入れる素養が研修以前に比べさらに高まったことが推察できる。BEVIの調査レポートから個々の学生を特定し、さらにその変容を分析することもできるが、今回はTEFL2023に参加した学生の全体的な変容について言及した。プログラムに参加する前とプログラムを終えカナダ留学から帰って来たときの学生の意識が変容したことから、この留学プログラムは概ね成功だったといえる。今回の調査結果だけでは対象人数が少ないため一般化することは困難であるが、このプログラムを継続することによって、さらにデータを収集・分析し、より正確な調査研究を進めていく必要がある。また、BEVIの結果に表れる数値の意味を深く研究することにより、学生の留学・オンライン研修の効果及び英語教員としての資質の向上に資する効果を検証していかなければならない。